モダン都市東京の噴水

楠　田　恵　美

1．問題の所在：モダン都市と噴水の想像力

本稿では，都市のなかの噴水が取り持つ人びとの関係のありようや，そこに広がる情景を描写するなかで，噴水が都市の生活を成立たせそのイメージをはぐくむ装置のひとつとして，いかに用いられ，志向されてきたのかを明らかにしたい。

> 屋内の噴水がなぜ夢をさそうのか，考えねばならない[ベンヤミン　L 1，1：49]。

特にここでは，モダン都市東京に生み出された噴水と屋内との関係に注目し，それらが体現するモダン都市からの／への感性を照らし出す。モダン都市東京では，おおよそ1903（M36）年にその時々の都市にまつわるイメージを引き受け，次々と新たなイメージをつくりだす「噴水」が生み出された。都市に対して絶え間なく注がれる想像力が築き上げる産物の一つであり，さらなる想像力を醸成する「噴水」は，モダン都市東京においてどのように生成し，展開したのだろうか。本稿ではこのことを明らかにする過程で，「噴水」を都市の源泉の一つとして捉えてみたい。

ところで噴水とは何だろうか。噴水とは，水路の起点と終点に，そしてその中間地点では陸上世界の要所につくられる水の噴出装置である。古代ローマでは，かつて市内に水道が敷設された際，その終着点に貯水槽が設けられた。そこに記念碑的な噴水（モストラ）が造られたことに噴水の始まりが認められる。著名な「トレーヴィの噴水」はヴェルジネ水道のモストラである。水道の最終放出口（outlet）に造られたモストラに対し，自然に湧き出る泉（spring）に，古代ギリシャのニンフ信仰に基づき，捧げられた祠（ニンフェーオ）もまた噴水と呼ばれる。古代ローマでは町の中をはじめとして皇帝や貴族の庭園にも，ニンフェーオ型の噴水がさかんにつくられた［竹山：2004］。

水路の起点と終点につくられるモストラやニンフェーオは，壁龕[1]や屋根を持つ神聖な噴水であるが，このほかにも，飲み水の汲み取りなど，陸上世界の生活に資する露天の噴水（フォンタナ）がある。これらの噴水も，生活に不可欠な水

の恵みをもたらした施行者や出資者の権力を誇示するため装飾性が強く，生活者に使用されることによって次第に，さまざまな伝説やいわれがはぐくまれるため，信仰の対象となるものもある。かくしてシンボルの噴水が姿を現すのである[(2)]。だが，これらの露天の噴水は，「建物のように固定されておらず，簡単に移動でき，しかも外観を容易に変えられるという生き物のようなモニュメント」［竹山 2004：53］である。必然的に設置場所が限定されるモストラや，建築物の保護のもとにあるニンフェーオに比べると露天の噴水は陸上世界の変化にさらされやすい噴水である。

このように，水の湧きでる起点，その流れの終点，そして中間点の各所につくられるモニュメントによって，形を成さない水を一時的に形あるもののように見せるのが噴水である。それは見方によっては，流れている状態それ自体としての様態が完成態＝盛り（もり）となり得る。本稿では，このような盛りをつくりだす装置を噴水と定義する。以下では，このような特質をもつ噴水がモダン都市東京に生み出されるまでに辿った変容を見ていく。

2．「街路の噴水」と「屋内の噴水」

(1) パサージュへの視角

ヴァルター・ベンヤミンの『パサージュ論』には，街路にある噴水と屋内にある噴水の二通りの噴水が登場する。以下に抜粋した断章にみられる「街路の噴水」は，都市の有する時間の広がりへの想像を掻き立てるものとして捉えられている。

> パリは活動的な都市，つねに動いている都市として語られてきた。だが，この町において，都市構造が持つ生命力に劣らず重要なのは，街路や広場，あるいは劇場の名前にひそむ抑止しがたい力である。こうした名前はいくら場所が変化しても残り続ける。（中略）「水の城」というもうとっくの昔になくなってしまった噴水の名前が，今日でもパリのあちこちの区に名残を留めている［ベンヤミン Ｐ１，１：319］。

> 夜中の一時を過ぎてパーティーはお開きになった。ほとんど人影がなくなっているパリの街を私は初めて見た。大通りではほとんど人に出会わなかった。昼間は人混みを掻き分けて進まねばならないヴィヴィエンヌ通りや株式取引広場には人っ子一人いなかった。聞こえるのは私自身の足音とあちこちの噴水の水の音だけだった。噴水のあたりは，昼間には耳を聾するばかりのざわめきから逃れるすべもないところだ［ベンヤミン Ｍ４，１：96］。

以上のことは，マクシム・デュ・カンの『パリ――その器官，機能，生命』[(3)]に依拠しながらベンヤミンが，都市の生活に連綿と受け継がれてきた噴水や湧水，

あるいは井戸をとおして，パリを組み立てることの可能性を書き留めていることからも確認することができる[4]。

『パサージュ論』のなかでパリにはぐくまれる生活の連続性を捉えるための手掛かりとして見出されている「街路の噴水」に対し，「屋内の噴水」は，都市の生活が含みうる一瞬にして消え去る儚い時間を象徴する物であるとともにパサージュへの視角を備えたものとして見出されている。この「屋内の噴水」の具体例として，次のようにグロービウスのパノラマ館にある噴水が紹介されている。

> ヘルクラーヌム〔イタリア地中海岸の古代都市〕風の装飾をほどこされた部屋に足を踏み入れると，そのまん中には貝を張り詰めた水盤があり，そこから小さな噴水が吹き上げていて，通り過ぎる者たちを一瞬引きつける［ベンヤミン Ｌ１，１：49-50］。

ここに登場する噴水が，通行者を一瞬しか引きつけないのは，それが飾り物としての噴水だからである。しかしそれに一瞬たりとも目を奪われた者は本来，屋外にあるはずの噴水が室内へ入り込んできているその様に，室内感覚を僅かに狂わされているのである。街路と室内との歩み寄りがパサージュを生成させているのだとすれば，屋内に噴水をもつ空間，「噴水のあるホール」もまたこのようにしてパサージュを体現するもののひとつに数えられる。

> パサージュを噴水のあるホールと考えること。伝説的な泉，パリのど真ん中に湧き出るアスファルト製の泉が中心にあるパサージュ神話に出会いたいと人は望んでいる。「ビールの泉」も，この泉神話から生まれる。病が治ることは一つの通過儀礼，一つの過渡的体験であるという考え方が，病める者のいわば治癒に向かって歩いて行く古典的な遊歩ホールで生き返ってくる。こうしたホールもパサージュである［ベンヤミン Ｌ２，６：58］。

パノラマ館や鉱泉を飲むホール[5]の他にも，ベンヤミンは「噴水のあるホール」を例示している。1851年にロンドンで開催される博覧会のために建造された水晶宮（クリスタル・パレス）がそれである。

ホールとは，もともと天井を語源にもち，その成り立ちには，壁によって仕切られている状態よりも，屋根によって覆いがかぶされた状態に重点が置かれている[6]。このような意味で，ホールとは，比較的風通しのよい屋内空間としてまず成立する。鉄骨ガラスでつくられた水晶宮もまた，広く高い天井をもつ広々とした空間であった。その天井の下に据えられた噴水は，自然的・人工的な佇まいを備えながら，水の循環運動をつくりだすことで，内部に瑞々しい空気を運びいれた。従来，街中の公共広場に設えられていた噴水が室内に持ち込まれることによって，新たにインテリアとしての立ち位置を築き上げていくのである。

(2) クリスタルの噴水，あるいはインテリアとしての噴水

そもそも，博覧会のメイン会場をどのような建築物とするのかは，博覧会開催が決定した後もしばらくのあいだ意見のまとまらないところであった。限られた予算と工期，そして厳しい市民の好みのすべてに耐えうる設計案がなかなか提出されなかったためである。危ぶまれはじめた博覧会開催の風向きを変えたのが，ジョセフ・パクストンの案である。「パクストンがハイドパークに出かけ，ガラスと鉄をみごとに合体させて，国民の産業ホールを造り出す」と新聞はうたった。パクストンはもともと建築家というよりも造園家であり，若くしてチャットワース邸の庭園管理を一任された経歴の持ち主である。この時代に，パクストンは，庭園の池のなかに，当時世界一高く水を吹き上げる噴水や，ガラスを用いた温室をつくるなど，積極的に最新技術を採用した造園を行った。

パクストンがすでに身に付けていた温室技術は水晶宮において見事に花開いた。ガラスのショウケースであるこの水晶宮自体が，1851年の博覧会でもっとも重要な見るべき展示物であったともいわれている。ゴットフリート・ゼンパーは，この水晶宮について，「ガラスでおおわれた真空には，何を持ち込んでも似合うだろう。それゆえ，クリスタル・パレスの使い道に関する提案ほど簡単なことはない。私はこのことばになんらふくむところはないが，仕事はガラスでおおわれた真空を建てることだった。この建物は私たちの時代が向かいつつある流れをかなり体現したものになるだろう」と述べている［マッキーン 1994：33］[7]。事実，この博覧会を終えたのちの公共建築や商業建築に水晶宮のモチーフは多大な影響を与えている。

水晶宮は，直方体に長く伸びる身廊に，翼廊が交差する十字型をしていた。その建設地に以前から植えられていた楡の大木を伐り倒さずにすませるために翼廊の天井がアーチ型にされたため，身廊と翼廊の印象は全く異なるものとなった。ゼンパーは水晶宮の異なる二つの廊下を次のように説明している。「身廊がオリジナルなクリスタル・パレスだとすれば，翼廊はまるでちがう。身廊のイメージは概して均一で陰影がなく明るく“工場の床”のはるか向こうにきえてゆく眺めがある。ダイナミックで柔らかい。しかし翼廊は自然で牧歌的で，動きのない白い彫像が樹木の間や噴水のそばにたたずむ。明確な境界線のある，陽光を燦々と浴びたきわめて天井の高い内部空間。この静止した古くさいヴィクトリア朝時代の空間」は「どこもかしこも際限なく広がる建物のなかで唯一の安定した地点」なのである［マッキーン 1994：44］。

このように対照的な身廊の線と翼廊の線が交差する一点に置かれたのが，クリスタル・ガラスを4トン使って作られた高さ約8メートルの噴水である。水晶宮に展示されたもののなかで最も“芸術的”でみごとなものであったともいわれるこのガラス製の噴水とは一体どのようなものなのだろうか。

【図１】交差廊に設置されたガラスの噴水

水晶宮の内部の印象は次のように記録されている。屋根硝子の上には何マイルもの黄褐色のキャラコ地の日よけがかかり，室内の光を和らげている。「私たちは戸外にでもいるかのように青いかすみでおおわれているように感じる。（略）この効果はじつに目に心地よく，それと同時にじつに自然で，どこまでが人工でどこで自然が終わるのかも区別しがたい」[8]。「ガラスにはもう本当の内部と外部はない。私たちと風景の間をさえぎるものは空気のようなものだ」[9]。このような自然と人工が入り混じった空間に足を踏み入れたひとびとは，「苛酷な世界で散り散りになった国々とヨーロッパとがこのガラスの建物のホールで友人として同胞として出会う瞬間」[10]が訪れたかのように錯覚する。

このように，これまで閉じられていた世界が開かれるという開放性と，開かれていた世界が閉じられるという閉鎖性の心地の良さを，水晶宮は一度に味わわせてくれる両義的な建物である。そのなかに造られた噴水もまた，室内に引き入れられた庭園と街路とが交差する一点に置かれることによって，庭園の噴水から温室の噴水へ，街路の噴水から屋内の噴水へという二重の移行を伴いながら，鑑賞される噴水への，新たな水準を築き上げた。それは，これまでのように彫刻や造形をほどこしたオブジェに水を噴出させる装置としての噴水というよりも，美しい水の流れを演出する容器としての噴水として捉えられる。水晶宮と同様，透かし見せることに優れたガラス製の噴水は，水と容器とが一体となって一つの世界を演出するのである。

(3) ソーダ・ファウンテン，あるいは室内としての噴水

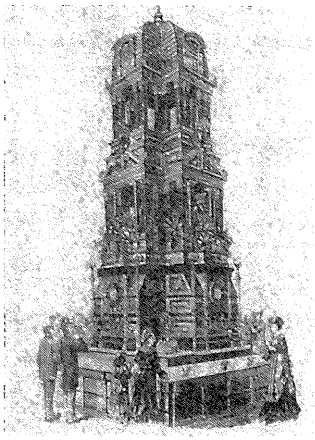
イギリスにおいて，街路と庭園の噴水が水晶宮のなかに招き入れられていたその同時代に，アメリカでも屋内の噴水がつくられていた。それは，鉱水を人工的につくりだす装置の開発後，改良が重ねられながら少しずつ普及していった，ソーダ・ファウンテンである。ソーダ・ファウンテンは，炭酸水を抽出する装置そのものを指すと同時に，ソーダ・ファウンテンから抽出した飲み物を提供する場所をも指す。はじめ，薬局の片隅に置かれ，薬用として飲用されることが意図されていたソーダ・ファウンテンだが，次第にさまざまな味のするシロップを加えて飲用されるようになると，そのソーダ水は，薬というよりもむしろ嗜好品として普及しはじめた。やがて純粋にソーダ水を提供する場所として薬局から独立すると，そこはソーダ・ファウンテンと呼ばれるようになった。アメリカの大都市のなかでも，早いところでは1850年までにはソーダ・ファウンテンが開設された。

1851年のイギリスの万国博覧会においても，食品，飲料水のフランチャイズ会社が多数出品し，蒸気機関を使ってアイスクリームやシャーベットを製造販売している。こうしたものは，それ自体が展示品となるが[11]，アメリカではソーダ・ファウンテンにおいて，展示品たる飲み物がつくりあげられる端緒が開かれたのである。ソーダ水の注がれるグラスは注がれたソーダ水を見るべきものへと変容させただけでなく，装置においても同様，はじめは飾り気のない単なる蛇口でしかなかったソーダ・ファウンテンは，次第に木や大理石に彫刻などの豪華な装飾がほどこされていった。このように華やかな装置から注いだ飲み物を提供する場所として登場したソーダ・ファウンテンは，次のように，アメリカ中の憧憬の的となり，室内空間としての発展を遂げていったのである。

> 多くのシカゴ市民たちはファウンテンを見たことがなかったため，ソーダ・ファウンテンがはじめてシカゴにお目見えしてから長らくの間，驚異を持ってその聖堂を迎え，崇拝した［Funderburg 1995：90-91］[12]。

> ハイラーのファウンテンは，ヴァサー女子大学の学生が頭を下げてうやまう聖堂である［Funderburg 1995：98］。

ソーダ・ファウンテンでは，その普及に従い奇抜な装置が開発されるとともに様々なシロップを組み合わせた新規のメニューが考案されていった。奇抜な装置としては，1876年にフィラデルフィアで開催された万国博覧会に出展されたソーダ・ファウンテンがその代表例である。この博覧会を飾るメイン展示物として，かつてないほど大きく華麗な大理石の塔 —— 高さ10メートルほどあるファウンテンがつくられたのである。これは，博覧会の開催中には大きな話題を誘ったが，博覧会が終了するとすぐに無用の長物と化した。大きすぎるため，どのソーダ・ファウンテンにも収容できなかったのである[13]。



【図２】フィラデルフィア博覧会に展示された巨大ソーダ・ファウンテン

新規のメニューとしては，この博覧会が開催されるまでに，すでにアイスクリーム・ソーダが登場していた。グラスに注いだソーダ水に，フルーツシロップをかけ，一掬いのアイスクリームを上に乗せたものである。「背の高いグラスを上品なピンク，鮮やかな茶色，または淡い黄色に色づけるアイスクリーム・ソーダは奇跡の冷たい飲み物だ」と賞賛されたちまち人気を呼び瞬く間にアメリカ中に広まった。さらに1900年までには，サンデーが登場している。これは，アイスクリーム・ソーダからソーダ水が除かれ，アイスクリームにフルーツやシロップをトッピングしたデザートである[14]。

ソーダ水を飲む室内としてはじまったソーダ・ファウンテンで，ソーダ水に別れを告げたレシピが生み出されていた頃，アメリカのある有名誌は，「ソーダ水はアメリカの飲み物だ」と宣言した[15]。一昔前までは目新しく，かつ高級品であったソーダ水は，いまやアメリカの必需品とまでみなされるほどになっていたのである[16]。だが，ソーダ・ファウンテンの時代は長く続かない。いくつかの代替物の登場により，ソーダ・ファウンテンは影を潜めていった。ソーダ水に様々なフレーバーを盛り込んだことに始まる各種のデザートを含む軽食メニューの取扱いをはじめたソーダ・ファウンテンは，飲み物屋から軽食屋への性格を強めたため，看板であるはずのソーダ・ファウンテンが軽食屋の片隅へ退いてゆくこととなったのである[17]。

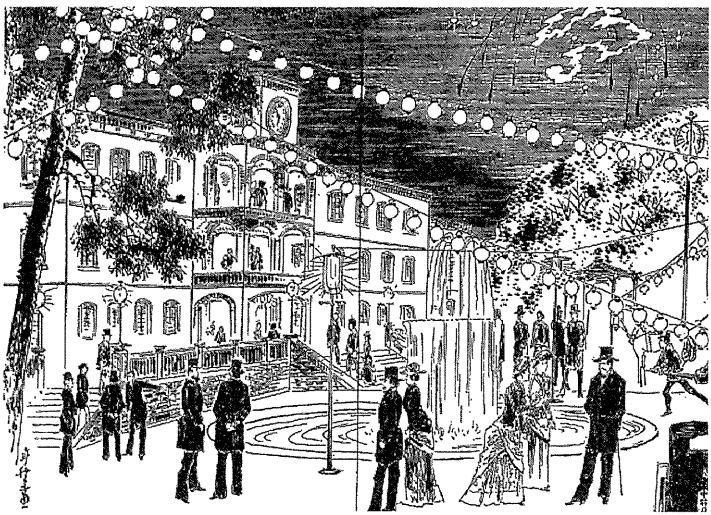
３．モダン都市東京の噴水

(1) 屋外の噴水

西洋式の噴水が日本ではじめて造られたのは1877（M10）年に開催された第一

回内国勧業博覧会においてであるといわれている。具体的な形状は定かではないが，会場中央の美術館の前につくられた泉水池のなかに噴水器が設けられていたという[18]。これ以降の博覧会においても噴水のつくられなかったことはなく，博覧会に噴水はなくてはならない展示物の一つであったようである[19]。博覧会が回を追う毎に，より大きく偉観な噴水がつくられていることをみると，1877年以降，回を重ねた博覧会こそが，真新しい輸入品である噴水を日本に根付かせる舞台であったといえる。しかしながら，当然，これらの噴水は博覧会の終了後，会場とともに取り払われる運命をたどるほかなかった[20]。

日本に恒常的な噴水が登場するには，1903（M36）年まで待たなくてはならない。この年に開園した日比谷公園のなかにつくられた噴水が，日本における常設的な西洋式噴水の最古のものとされる[21]。これは，1877年の博覧会でつくられたものと同様，池の中に設けられた。興味深いことに，噴水という装置が日本にとってみれば輸入品であったばかりか，博覧会という特別なイベントを除けば，これが初めて備え付けられる噴水であったにもかかわらず，その意匠に伝統的な鶴があしらわれ，日比谷公園のなかの日本式庭園の区画に設置された。日比谷公園の噴水の完成から二年後に浅草公園に竣工した噴水にもまた伝統的な龍の意匠が採用され，噴水泉と呼ばれた。たとえ，新しく渡来した装置であるとはいえ，湧き出る泉を彷彿させる噴水のその様は，伝統的な日本式庭園や神社仏閣にも比較的親和性の高いものだったのかもしれない。とはいえ，このような和洋折衷に応用された噴水と並び，西洋式の建築物とともに西洋風の噴水がつくられたこともまた事実である。建物の正面に設けられる，建物へのアプローチを飾る噴水がそれである。



【図３】明治26年に描かれた明治40年の鹿鳴館

以上から，日本における西洋式噴水は，1903年ごろまでに主に博覧会や公園に設けられることによって，次第に定着していったといえよう[22]。

しかしそれだけでなく，当時の日本では，噴水が，屋外のみでなく屋内にも設置されていたことを確認することができる。1903年，屋外の噴水と屋内のそれとを架橋するものとして中庭の噴水がつくられている。そして同年に日本式のソーダ・ファウンテンともいうべき噴水のホールが開設されている。同じく1903年に卓上の噴水の出現を確認することができる。このような意味で1903年頃に日本では噴水の想像力の萌芽期を迎えていたといえる。

(2) 屋内外の噴水

1903年，日本橋白木屋では，店舗の改築工事が竣工した。座売方式の廃止と商品陳列方式の採用，ショウウィンドウの設置など，この改築により販売方式の大部分が百貨店方式へと変更された。このほかにも店内には採光用ホールと呼ばれる三階までの吹き抜けや食堂が設けられ，その後の百貨店が確立していく典型的なスタイルが整えられようとしていた。この改築ではさらに敷地内に中庭が設けられ，そこにつくられた池の中に噴水が設置された。この池には鯉や金魚も放されていた。だがこの中庭は，1911（M44）年に行われた大増築によって，撤去されたようである。

白木屋には，江戸時代に掘られた白木名水と呼ばれる井戸があり，その井戸神話に基づく観音堂とともに旧来から信仰と評判を集めていた。その意味では，白木屋はかねてより泉とのかかわりの深い商店であったといえる。関東大震災によって，井戸も観音堂も焼失したが，1928（Ｓ３）年の修築で７階建ての店舗が建てられた際，それらも復興された。白木観音堂は屋上に建立され，一方の白木名水井戸は噴水として蘇った。日本橋通り北側に設けられた三連アーチの壁面に，地下二階から引いた白木名水を噴出させていたという。

日本橋三越ではじめて噴水がつくられたのは，1907年である。それは二階建ての建物の屋上に開設された空中庭園の一角に花壇，藤棚とともに配された。白木屋の噴水が屋内と屋外の中間に位置する中庭に置かれたとすれば，三越の噴水もまた，屋内の延長上にある屋外につくられたといえる。外気に触れ，眺望を楽しむことを可能とした屋上庭園は，室内に閉じられた百貨店の世界を拡張した屋外であるといえる。取扱商品の増加と売場の増床にともない休憩や息抜きのできる場所が必要となった百貨店では食堂や庭園がつくられた。百貨店のなかにいながらにして，その世界から一時的に息抜きに出ることを可能とする内外の仲介点に噴水は設置されたのである。

(3) 噴水のホール

同じく1903年に，浅草の舟和が「みつ豆ホール」を開いた。従来しん粉を用い，赤えんどう豆，糖みつをかけただけのみつ豆を，モダンな洋銀の器を使用して，

角寒天，甘煮杏，ぎゅうひ，赤えんどう豆を盛り，白蜜，黒蜜のどちらかを好みに合わせてかけて銀製のスプーンで食べるみつ豆へと変え，それをモダンなホールで提供したのである。この新しい販売方式の目指すものとは衛生的に高級感を増すことであった[23]。

それよりも一年早い1902（M35）年，銀座の資生堂薬局店内にソーダ・ファウンテンが設けられている。アメリカを視察した当時の店主が，薬局が飲料水の販売を兼ねているのを見て，帰朝早々，ソーダ・ファウンテンをアメリカから輸入して店内に置いたという[24]。日本のように氷水屋がないアメリカでは，ちょっと外へ出ても，簡単に渇を潤すことが出来ない。そのかわりに薬局や病院に設けられたソーダ・ファウンテンに立寄って，ソーダ水やアイスクリームなどを求めていた様に倣い，資生堂でも当時銀座にはなかった子どもや女性も安心して一休みすることのできる，衛生的な店を設けようと試みたのである。

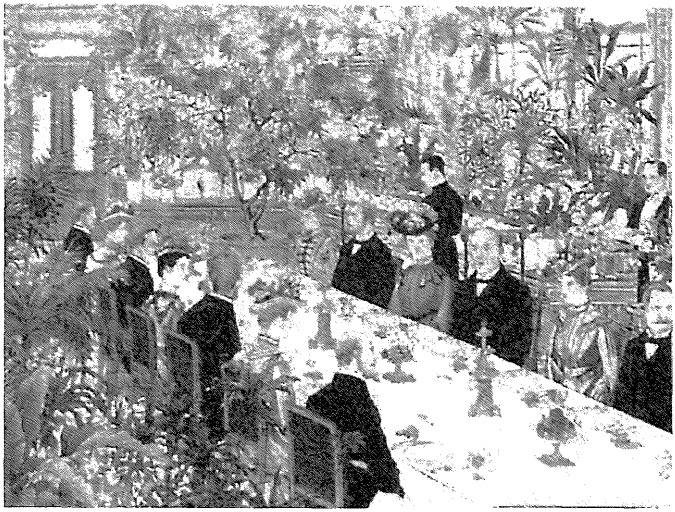
さらに，年代は定かではないが，果物店の千疋屋がフルーツパーラーをはじめるに至ったきっかけを，手づかみで果実を立ち食いしている外国人に，椅子とテーブルを提供したこととしている[25]。そして本格的なパーラーを設置する際，それに相応しいメニューづくりの着想を当時の店主の欧米視察から得ている[26]。

従来から日本に存在していたといわれる水屋（または水売り）とは，飲料水を運び売る行商人のことと，泉から汲んだ冷たい水に白砂糖と白玉を入れて売る行商人のことを言った。これらは露店であり，屋台の周囲に腰掛を置いて接客したという。このような水屋の設備を屋内の店舗に常設化したのが，これらのホールやパーラーであるといえる。ホールやパーラーではまるでそこから湧き出たかのように様々なところから集められた材料が容器に華やかに盛られて提供され，その場で享受される。もともとそこは決して長居する場所ではなく，一つの器に盛られたものを食べ終えるとすぐにその場を後にする。だからこそ，そこで提供される一皿の盛りには完成度の高さが求められる。室内に引き入れられることによって豪華さと簡素さが拮抗することになったのである。

4．結びに代えて

これまで，水晶宮，ソーダ・ファウンテンの展開を踏まえ，モダン都市東京につくられた噴水を辿りながら屋内の噴水の有する想像力の広がりについてみてきた。噴水とは，もともとは水道の要所に設けられるモニュメントであった。それが水晶宮において，ガラス・インテリアとしての性格を与えられると，水と一体化し，一つの盛りの状態を生み出した。盛りとしての噴水は，あらゆるものをいったん吸収しては放出しながら内側と外側との活発な循環を促す装置となる。ソーダ・ファウンテンのような噴水のホールにおいては，その閉じられた空間で様々な材料が完全無欠な状態で一つの容器におさめられ，あふれ出している状態を呈する。そういった，汲み取っても尽きることなく湧きだす噴水を抱え込んだホ

ールは，それをホールという空間に誘い入れ，閉じ込めようとすることでとても贅沢な空間として成立しようとする[27]。



【図４】植物の繁る室内と卓上の〈噴水〉

1903年，大阪天王寺で開催された第五回内国勧業博覧会の東京別館において香水の噴水が出品されている[28]。1915（Ｔ４）に刊行された『卓上噴水』の作者のいうところによると，「卓上に香水の噴水を設けることは，此世の中に於いて，これ以上の贅沢はないといふ意味」をもつ[29]。

これまでみてきた屋内の噴水は以後，都市の盛り場のなかでどのような位置を担いながら展開していくのだろうか。残された課題として別稿に譲りたい。

註

(1) へきがん：彫像などを置くため壁面にもうけられたくぼみ

(2) シンボルとしての噴水。「市場の広場には，特にアルプス以北のあらゆる都市にみられるとおり，ほとんどいつも市庁舎がたっている。そこには水盤をそなえ空間の許すかぎりおおがかりな噴水も欠かせないものとなっていて，今日でも市場の噴水と呼ばれている。もっとも，快活で活気あふれた商業活動はもうずいぶん前から屋根のついた市場ホールの鉄とガラスの籠に移されてしまったが」ジッテ，カミロ1901＝1968『広場の造形』大石敏雄（訳）美術出版社，ｐ22。

(3) 1875年，263ページ［ベンヤミン Ｃ２，２：187］。

(4) 「パリを，さらにその『湧水（フォンテーヌ）』からも組み立ててみること」［ベンヤミン Ｃ２，２：187］。

(5) 「医術の神アエスクラピウスの神殿としてのパサージュ，噴水のあるホール。治療行脚。(渓谷の中の鉱泉の湧き出るホールとしてのパサージュ —— シュールス＝タラスプやラガツ〔ともにスイスの温泉地〕にこれがある)」[ベンヤミン L 3，1：62]。

(6) 「『ホール』〔Halle〕という単語そのものの語源も，天井にある。ホールとは上に天井を張った空間であって，囲い込んだ空間ではないからである。側壁はいわば「隠れて」いるのである」A・Gマイアー『鉄骨建築』〈エスリンゲン，1907〉，69ページ [ベンヤミン F 4，4：365-366]。

(7) この擬似自然のなかでくりひろげられるのぞき趣味の感覚は，クリスタル・パレスから百貨店へと直接に引き移される [マッキーン 1994：28]。

(8) メリフィールド夫人の談 [マッキーン 1994：33]。

(9) リヒャルト・ルカエの談 [マッキーン 1994：32]。

(10) アルフレッド・テニソン談 [マッキーン 1994：32]。

(11) [マッキーン 1994：39-40]

(12) 1848年にシカゴ初のソーダ・ファウンテンがオープンしたときの様子。

(13) やがていったんコニー・アイランドに移されたのちに，ようやく1885年にセントルイスの有名な衣料品店が購入，集客力の強い人気アトラクションの一つとなった。しかしながら，店舗の火事とともに失われた。

(14) どのようなフレーバーや果物の組み合わせも可能だが，主流は，ピーチサンデー，その他，洋ナシ，オレンジ，ラズベリーなどであった。

(15) 1891年 [Funderburg 1995：97]。

(16) この時アメリカには5万から6万ヶ所のソーダ・ファウンテンがあった。

(17) ソーダ・ファウンテンはファーストフードを準備したともいわれる [Funderburg：2002]。さらに，瓶詰めのソーダ水の登場によりソーダ・ファウンテンに依らずともどこでも手軽に喉の渇きを癒せるようになったこともその一因である。そして特に重要なのは，自動車の普及である。街歩きの途中にぶらぶらと寄る場所であったソーダ・ファウンテンは自動車の客にとってみれば遠い存在であったのである。

(18) 服部長七（1840-1919）土木技師による設計 [愛知県小中学校長会／編『郷土に輝く人々』愛知県教育振興会，1970，pp110-117]。

(19) 「明治10年の内国勧業博覧会には美術館の前へ不忍池の水を引て噴水器を設けられたが，来年の博覧会には関口の水道を引いて先年よりは余程高く上る噴水器を設けられるという」[読売新聞，1880．9．4朝刊]。

(20) 例外的に，1881年内国勧業博覧会の会場につくられた噴水は会期後もそのままにされ，「公園の美観に供えられ」た [読売新聞1880.10.6朝刊]。

(21) 通説ではこのようにいわれているが，読売新聞によると，博覧会以前には「帆付風車にてポンプの水を吹き上げさせる」(1874.12.10) 装置が駒込追分町に，「泉を拵えて高く吹上させる工夫」(1876.10.9) が工学寮のなかにつくられ

ている。同様に，読売新聞によると，博覧会後には，九段招魂社の境内に水盤の噴き水(1878. 7．4)，浜町久松座の樹園に三段の噴水[ふきみづ](1879. 2．20朝刊)，九段坂下の公園に噴水［ふきみづ］(1880. 8．8朝刊)，根津須賀町の貸座敷大八幡楼店前の池の中に噴水器（1881. 6．26朝刊)，浅草区役所の人民控所の庭前に噴水（1886. 8．8朝刊）など，日比谷公園開園以前にも市内にいくつかの噴水がつくられていたようである。

(22) 「東京の噴水はどこが一番早いか，博覧会などの一時的設備を除けば，やはり公園の池の噴水をあげなければならぬ」[柴田宵曲1971＝2007『明治風物誌』ちくま学芸文庫 pp121-123]。また，柴田や新聞記事［読売新聞：1905. 7．17]によると，明治期には，家庭の庭に取り付けられる噴水の玩具が存在したようである。

(23) 1930（S30）年には，銀座で汁粉屋を商っていた若松が，このみつ豆にあんこを載せた，あんみつを完成させている。

(24) 福原信三「ソーダ・ファウンテンの経営」『千葉薬学誌』第三号，36-37，1925

(25) ［初田2001：410]

(26) 銀座千疋屋フルーツパーラーでは，特注した脚の長いカクテルグラスにパンチ（リキュールやジンの利いた軽いカクテル）にさまざまな果物（静岡の温室メロン，甘い新種リンゴのスターキング，岡山の黄桃，地中海産のオレンジやレモン，台湾産のバナナやパイナップルにパパイヤなど）を刻んで盛り，飾ったフルーツポンチやフルーツサンデー，フルーツパフェ，フルーツアラモードなどのメニューを開発した。

(27) ベンヤミンもまたトニー・モアランの小説を引きながら，サロン型街路について書きとめている。それは，パサージュのなかにつくられる一つの完全に向かおうとする充実した空間である。

「二階はギャルリ型街路が占める。……大きな道に沿ったところでは……ギャルリ型街路はサロン型街路となる。……これよりずっと狭いほかのギャルリは装飾がより質素である。これには小売業が当てられ，そこには，通行人が店舗の前ではなく，その内部そのものを往来する形になるよう商品が陳列された。」トニー・モワラン『2000年のパリ』1869年，15-16ページ（「モデル・ハウス」）［ベンヤミン Ａ８ａ，３：109]。

サロン型街路。「それら〔すなわちギャルリ型街路〕の内のもっとも広くもっとも良い場所を占めるものは，入念に装飾され，贅沢な家具が備えられた。壁と天井には……珍しい大理石，金箔……鏡が張られ，絵が飾られ，窓には豪華な幔幕と見事な絵の刺繍のあるカーテンが掛けられ，疲れた散策者が容易に腰掛けられるよう，……椅子，肘掛け椅子，ソファが備えられ，また，芸術的な家具，古代風の長持ち……骨董品をたくさん飾った陳列窓……生花を生けた花

瓶，生きた魚を放した水槽，珍しい鳥を入れた大鳥籠が，夜ともなると……金めっきした燭台型照明器具とクリスタル・ガラスのシャンデリアで照明されるこうしたギャルリ型街路の装飾を，さらに充実させたのである（後略）」トニー・モワラン『2000年のパリ』1869年，26-29ページ（「ギャルリ型街路の外観」）［ベンヤミン A 9 a，1：112-113］。

(28) 「工業館前の噴水等の絵」『風俗画報』臨時増刊275号（1903. 9 .25）国立国会図書館「博覧会 —— 近代技術の展示場」（http : //www.ndl.go.jp/exposition/index.html）より。

(29) 『卓上噴水』Vol. 1－3，1915. 3，4，5，雑誌の命名は室生犀星，この発言は萩原朔太郎。伊藤信吉「卓上噴水解題　イマジズムの詩人たち ——『卓上噴水』を中心として」近代文芸復刻叢刊1979

文献

ベンヤミン，ヴァルター2003『パサージュ論 1－5 巻』今村仁司・三島憲一ほか（訳）岩波現代文庫

Funderburg, Anne Cooper 1995 *"Chocolate, Strawberry, and Vannila : A History of American Ice Cream"* Bowling Green State University Popular Press

—— 2002 *"Sundae Best : A History of Soda Fountains"* Bowling Green State University Popular Press

初田亨2001『繁華街にみる都市の近代 —— 東京 ——』中央公論美術出版

株式会社三越2005『株式会社三越100年の記録』

株式会社資生堂1957『資生堂社史　資生堂と銀座のあゆみ八十五年』

株式会社白木屋1957『白木屋三百年史』

前島康彦1980『日比谷公園』東京公園文庫，郷学舎

マッキーン・ジョン1994『クリスタル・パレス』リリーフ・システムズ（訳）同朋者出版

中川良隆2009『水道が語る古代ローマの繁栄史』鹿島出版会

資生堂企業文化部（編）1993『創ってきたもの　伝えてゆくもの　資生堂文化の一二〇年』求龍堂

竹山博英2004『ローマの泉の物語』集英社新書

東京都1985『東京の水売り』東京都公文書館

戸矢理衣奈2009「広告としての資生堂パーラー —— 交際様式の変容と『パーラー（洋間）』」『日本研究』第40集，国際日本文化研究センター

吉見俊哉1984『都市のドラマトゥルギー』弘文堂

—— 1992『博覧会の政治学』　中公新書

吉田光邦（編）1985『図説万国博覧会史1851-1942』思文閣出版

図版

図1．"THE TRANSEPT OF THE GREAT EXBITION Looking North" Tallis, J. et al.: *Tallis's history and description of the Crystal Palace* [1851？]「水晶宮内部（噴水，斜め上部から）」国立国会図書館「博覧会 —— 近代技術の展示場」(http://www.ndl.go.jp/exposition/s 1/1851.html) より。

図2．"This Tusts soda fountain created a sensation at the 1876 Centennial Exhibition in Philadelphia." [Funderburg 1995 : Illustrations, No.5]

図3．「鹿鳴館の宴遊」末広鉄腸1893『明治40年の日本』青木嵩山堂，扉絵。国立国会図書館，近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/index.html）より。

図4．「大隈伯邸花壇室内食卓真景」（水野年方画）『食道楽』冬の巻口絵，村井弦斎1903-1904＝2005『食道楽（下）』岩波文庫より。